
海の都の少女

Andrea Giuliotti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海の都の少女

【Nコード】

N8027V

【作者名】

Andrea Guillotti

【あらすじ】

16世紀イタリアの海洋都市国家ヴェネツィア共和国。両替商の娘チエチーリアは、婚約者エンリコ・ロレダンに婚約破棄をされてしまう。祖父から自身の婚約破棄の理由と、自分の出生の秘密を知ることになる。そんな彼女の運命は如何に？

史実のヴェネツィア史をモチーフにしていますが、この話はフィクションです。しかし、彼女のような人物は史実にも居たかも知れません。当時の世界情勢と風習が出て来ますが、出来るだけ分かり易

く解説するようにします。

最後に、この作品は作者が自分の技術を磨くために作った練習作品です。未熟な技量なので、読みづらい点も多々あるかと思いますが、最後までお付き合いいただけたら幸い。

第一話 ヴェニスの少女

家の窓を解き放てば、景色は霧が掛かり道行く人々は朝の寒さに外套を固く握りしめて、歩んでいく。運河に見えるゴンドラは霧で隠れ、漕ぎ手が櫂を動かす姿は影絵のように幻想的だった。

1568年4月、ここはヴェネツィア。地中海随一の海洋都市国家の首都にして、街中に運河がアラバスター細工のように走っている。この世界でも類を見ない都市だった。

「チエチーリア、御来客だ。一階に下りて来なさい」

「はい、お父様」

私の名前はチエチーリア・モディリアーニ、この街の両替商ロレンツォ・モディリアーニの1人娘だ。一階に降りると、ロレダン家の使者の方だった。

エンリコ・ロレダン 私の愛しい婚約者。殆ど顔を合わせた事は無いけど。でもいいの、私にはとつても素敵な人だから。このヴェネツィア共和国の貴族の家系、ロレダン家の人物で、元首ピエトロ・ロレダンの直系に当たる人物だわ。何故、そのような人物と商人の娘の私が婚約関係にあるのかと言えば、父の20年ほど前に友人に連なる家系だったからだそうだ。

「これは、ロレダン家のフランチェスコ様、本日はどのような御用

件で？」

「ふむ…ロレンツォ殿、単刀直入に言いましょう」

「……貴公の娘御と我が家との婚約を撤回させて頂く」

私の目の前が真っ暗になった。

「……それは一体どういうことでしょうか？」

父がやや強い口調で言い返す、当然だ。婚約破棄などよほどな理由で無いと起こり得ない。しかし、使者は顔色一つ変えずに平然と言
い放つ。

「知れた事を…下賤な人間の血が我が家に入るのは困るのですよ」
「なんだと！」

使者の台詞に激昂したのはお爺様だ。杖を持つ手が震えている。

「ワシらを侮辱するのは構わん、だが、愛しい孫娘を罵倒するのは許さん！そもそも、我がこのような暮しをしているのは誰のせいだ
と思っている！」

「今すぐ、この家より出て行けッ！
婚約など此方から願い下げだ。ロレダン家の人間の顔など金輪際見
たくないわッ！」

肩で息をする祖父に使者は、平然と発言する。

「婚約破棄という事で宜しいですな。
こちらで話が早く済んで助かりました。では、失礼致します」

使者の方が家を後にすると、私は思わず椅子に崩れ落ちる。祖父は私を抱き起こす。

「チエチーリア、何も心配する事はない。元々、上手く行くはずの無い婚約だったのだ。お前には必ず良縁を探し出してやろう」

「ロレンツォ！ワシは元々この婚約は反対だったのだ。下らん友情に釣られて、無理に婚約するからこのザマだ。チエチーリアは泣いておるぞ、全て貴様のせいだ！」

祖父の責めに父は顔を伏せる、しかし、誰かこのような展開を予想できたか、昨日まではあれほど幸せな日々だったのに……神よ、どうしてこうなったのですか？

「行こう、チエチーリア」

祖父と共にその場を後にする。後に残された父の姿はいつもより小さく見えた。

「ゴーボよ、あのペンダントを持ってきてくれんか？」

「畏まりました。旦那様」

祖父の書斎に行くと祖父は窓の扉を開け放つ、重い木の扉が軋む音を鳴らしながら見える景色は霧が晴れ、青い空と大運河を挟んだ対岸見える。

サン・サルヴァドール教会が、その奥、遠くに見える鐘楼と白っぽ

い大聖堂のドームが、赤い屋根の大地に映し出されていた。

「チエチーリア、少し昔話をしようか…」

「お前の母上はな、あの男と駆け落ちして結婚したのだ。ワシはその事は今でも怒っておる。自分が手塩にかけて育てた娘を横から掻っ攫われたのだ。許せるはずもない」

「わしとあの男の仲が悪いのもそう言う事なのじゃ、分かったかね」

私は頷く、お爺様は何が言いたいのだろうか？

「今回の婚姻に反対だったのは、駆け落ちしたあの男が許せんのは当然じゃが、それよりも身分の差の方が問題だったのだ」

「……私が、商人の娘だったからですか？」

祖父は頭を振る、少し苦い顔をしたが、意を決して発言した。

「チエチーリア、良く聞きなさい。わしとお前の母親は、改宗キリスト教徒なのだ」

予想外の言葉に私に思考は止まった。

「わしはユダヤ人の銀行家だった。しかし、ある商人の罠に嵌って改宗せざるおえなくなったのだ」

「でも、改宗キリスト教徒であれば、この国に住めないはずでは！？」

この国では現在ユダヤ人が滞在する事は法律で禁じられている、改宗者も1550年の法律により居住権は無いはずだ。

「その通りだ、だからわしはこの国の人間では無い。この家には滞在しているということになっている。母親も同様の扱いだ。だが、お前は正式な子供として認められている、お前は間違いなくキリスト教徒だ」

「だが、いつの世もその事を論じる輩は多い。お前の母親もその心労から体を壊して亡くなった」

「わしが今回の婚姻を反対した理由はその事だ、お前には幸せになつて欲しい。だから貴族などと結婚させるのはゴメンだ……今回の件で良く分かったろう、貴族と結婚することがいかに難しいかと」

私は絶望した。幸せだった日々が、夢が全て幻想に過ぎなかったことに、

そして、私の身体に流れる忌まわしきユダヤの血に…

ユダヤ 主イエス・キリストを葬った忌まわしき人種。

唾棄すべき罪人の一族、薄暗い居住区に籠り、金貨を数える貪欲で不潔な存在。

教会の説法で学んだ呪われた人種の血をこの私の中に流れているですって！

「現元首のピエトロ・ロレダン殿は、今年就任したばかりで立場が非常に不安定なのだ。己の権限を崩さない為にも、不安要素は排除せねばなるまい。つまりそういうことなのだよ」

「お爺様」

ひどく冷たい声が出たと思った。

「私の中に流れるユダヤの血のせいですか！？今回の婚約が破棄されたのは、お爺様とお母様の血が原因ですか！？なんでッ、私は……何もッ……」

そこまで言って祖父の顔を見上げると、目を見開き、顔を強張らせていた。

絶望の色に染まる祖父の顔を見ていられず、後ずさる。

「……あつ、お爺様ごめんなさい。私……そんなつもりは……」

それ以上言えずに部屋を飛び出すと、使用人のゴーボと衝突した。手に何か箱を持っていたようだが、構わず自室へと掛け込む。

寝台にうつ伏せに倒れると、枕が涙で染まった。今は何も考えられなかった。

目が覚めると、外は夕闇に染まり、行きかう船も人も無かった。部屋のランプには火が灯っていた。誰かが点けてくれたのだろう。

机の上にはゴーボが持っていた飾り細工の箱が置かれていた。中を開けてみると、麗しき貴婦人の横顔が描かれたペンダントだ。

「……お母様」

記憶の中に微かに残っていた母の顔が、その死から10年の時を

経て、鮮明に思い浮かぶ。

僅かに憂いを残す、その肖像画の母は一体何を考えていたのだろうか。

自分を理解しない周囲に対する憎しみだろうか？

差別される己の身に降りかかる仕打ちを嘆いていたのだろうか？

それとも、己に流れる血を呪い絶望していたのだろうか？…
今の私の様に。

「私がユダヤである以上、幸せな生活はもう送れない」

「そしてユダヤ人はこの国から出て行かなければ成らない」

己の暗い未来を噛みしめるように、自分に言い聞かせる。

短刀を引き抜き、長く伸ばした三つ編みに当て、引き下ろす。

「それが、主の望んだ事だから…」

翌朝、ゴーボの服に着替えて、誰にも悟られぬように家を出る。

「ゴーボの背が低くて良かったわ。お腹とか肩とかは緩いけど、ベルトを締めれば何とかなってしまうのだから」

葦色のフェルト帽を深く被ると、14年の生涯を過ごした屋敷の門を振り返る。

「お父様、お爺様、皆……さようなら」

先を見れば、一見先の家の看板さえ見えない深い霧、私の未来を案じている様だった。

家を出て道を進み、木製のリアルト橋を渡り、サン・サルヴァドール教会までたどり着いた事までは良かった。

いつものミサで行く教会で、ティツィアーノの名画「キリストの変容」が描かれている教会だ。と言っても、産まれてこの方、他の教会に殆ど行った事は無い。数年前のクリスマスにサン・マルコ聖堂へミサに行った時ぐらいだ。

ヴェネツィアの淑女は、家に籠ってレースや勉強をしているのが美德とされている。

勿論、私もその通りに育って、それが当たり前と感じるようになった。

つまり、ミサに行く時ぐらいしか、家から出かける事は無かった。

「勢いで出て来たのはいいけど…この先どうするのかしら？」

ふと、私の頭には祖父の書斎から見えた、サン・マルコ聖堂と鐘楼が頭に浮かんだ。

「あの広場に出てみれば、何か良い事あるかも」

考えが甘かった。ヴェネツィアの町は運河と通りが複雑に入り組んでいる。

道も所々、運河と衝突していたり、橋が無くて向こう側に渡れなかったりする場所が数多くある。観光客が迷っている日常風景だ。警士の人間に聞いてみても、早口で何を言っているのか要領よく聞き取れない。

道に迷った末に海沿いの広場に出た頃には、足が棒になり、もはや立ち上がる事も出来ない。ここが、どの街区だとかはどうでも良くなり、ただ壁に背中を付けてしゃがみ込んで居た。

「…疲れたわ、お爺様心配しているのだろうな」

膝に額を付けて、地面を見つめて目を閉じる。

薄れ行く意識の中、足音が聞こえて、話し声がした。

「おい、コイツじゃねえか？今日出港するガレー船の漕ぎ手って…」
「酔いつぶれてるのか？いい気なもんだぜ。持ち上げて連れて行くぞ」

頬と叩かれて目を覚ます。

中天の日差しが、私を起こした男性の姿を影絵に変える。

良く目を凝らして見てみれば、その男性は10代後半の青年で、

亜麻色のウェーブ掛かった長髪で、その緑の瞳は、窓から見える大運河のように光の当たり方で様々な色彩に輝いていた。

「船長！目を覚ましましたよ。でも、どういふ事ですか？違う人物ですよ」

……船長、まさか此処って！

はっとして、体を起こすと、其処は木製の板ざらしの上で、周りには体格の良い男性が数人、私を取り囲んでいた。

彼らを押しのけると、手摺まで走り寄り、彼方の景色を望む。

視界の後方に、懐かしきヴェネツィアの元首宮殿と鐘楼、その街並みが小さく見えた。そして、周りはエメラルド色の海。ヴェネツィアの反対側を見れば、古都リードの街並みが見え、その奥には深い藍色のアドリア海が顔を覗かせていた。

「あー、商用ガレー船サン・カテリーナ号へようこそ……船長のソランツォだ」

「えええええええッ！！」

第二話 ヴェニスの船乗り

アドリア海の水の宝玉ヴェネツィア共和国、生まれ育った地を初めて遠くから眺めた。

海上から見る我が故国は、ムラーノのガラス細工のように繊細で、この都市を築きあげた先人たちの努力が偲ばれる。

息をするのを忘れて景色に見入っていた私は、後ろから掛けられる船長の声にひどく驚いてしまった。

「いい景色だろ、坊主。船に乗るのは初めてか？」

「うわっ…はい、初めてです…」

「済まねえな、お前がこの船に乗ったのはこっちの手違いだ。髪型と体格が良く似た漕ぎ手が出港時間に遅れたので探していたな」

ソランツォ提督は日に焼けて縮れた髪をボリボリ掻きながら、私に説明する。

「警士の奴等にも頼んだのだが、どうも間違えたようだ。心配するな、パレンツォの港で降ろしてやる。帰りの船の書状も俺が書いてやるから、気にせずに船旅を楽しめ」

どうやら、私の事は男性と間違えられたようだ。

ドレスでは出歩きにくいのでゴーボの服を持ちだしたのだが、髪を肩ほどで切り落としたのも有るかな？好都合だ、このまま通そう。

「ありがとうございます、ソランツォ船長。その漕ぎ手は見つかったのですか？」

「あの馬鹿は首だ、人手が足りないから今まで我慢してやったが、船の時間に遅れるとか言語道断だ。クソッ……」

この船は人手が足りないのか……ますます好都合ね

「……あの、私で良ければ雇ってくださいませんか？」

私の発言に、暫く体を見まわして「まあ、慣れれば何とかなるか」と呟き採用してくれた。役職は雑用係だった。理由は船の事以前に一般常識が欠落していたからだ。

仕方ない事だと思う。レースの編み方ならともかく、船具の名前や縄の締め方、重い道具を運ぶ力なんて全く専門外だ。

私がいかに恵まれた生活をしていたか、改めて思い知らされた。

へとへとになり、その日の仕事を終えて部屋に戻る。

本来なら見習い船員は雑魚寝だが、全くの初船乗りなので下手に共同部屋で吐かれたら困るという事で、面倒を見てくれる先輩船員の

個室で暮らすことになった。

「ねえ、君の名前を聞いていなかったね。なんて言うんだい？」

彼は石弓兵のアントニオ、私を叩いて起こしてくれた人で、船長に私の世話を押し付けられた船員だ。14才の時から今年を含めると4年間も船に乗り続けたベテランの乗組員だ。

「……シロツコ」

「……ふざけてる？」

「ふざけてない。本当にそう言う名前だったもん」

シロツコと言うのは南東から吹く風の事で、エジプトへ向かう交易船にとっては全くの逆風だ。船長に名前を聞かれて咄嗟に名乗った名前だった。

「ふーん、姓はあるの？」

「無い」

「本当の事を言えよ」

「……アンドロギュヌス」

「……喧嘩売ってる？……まあいいか、これから宜しく」

「うん、宜しくね。今日は疲れたからもう寝る、おやすみ」

「おい、そっちは俺の布団！」

敷布団に横になると、直ぐに睡魔が襲って私を眠りへと誘った。

「……全く、とんでもない子供だな」

眠るシロツコを忌々しげに見つめるアントニオだった。

彼は、14才の頃から家の方針で石弓兵となった。この国ではある程度の資産を持つ家はその子供を商船の石弓兵として乗船させるのは一般的な道だった。船乗りとして航海の技術を学び、海外を訪れて他国の文化や情勢、商売の技術を修得させるのだ。

その後はそのままベテラン乗組員として続けて、いずれ船長になるか、大学に進学するかは人によりけりだが、彼は来年より大学へ進学する事になっている。つまり、今年の航海が最後の交易となるはずだった。

「その途端にコレだとはね…」

彼の実家の親戚が船長を務めるこの船に、破格の待遇で乗り込み、今年の交易は楽できると思った矢先に見知らぬ少年を同室にされてしまった。

この少年との出会いも衝撃的だった。

「おい、アイツが見つかったらしいぞ！」

「本当か！？やっと出港できるぜ！」

「今度という今度は許さねエ…袋にしてやるぜ」

その漕ぎ手は船の中でも相当な鼻つまみ者だった。

勤務中に酒は飲むわ、いびきは煩いわ、上陸中も常に酒瓶抱えて寝転がるわの酒乱で、人手不足で無かったら間違え無く解雇されていた。

遠くに小船が見えて来たので、帆を張って船を動かす準備をする。先行する船団から既に2時間も遅れている。余り遅れる訳にはいかない。

3本のマストに三角帆を全て張り終え、少しずつ船が前進し始めた辺りで小船が追いついた。

「待たせたな！言われた通りだった。道端で寝転んでいたぜ！」

本当に酔いつぶれていたか…度し難いくでなしだ、弁解の余地はない。

船尾に接舷して、警士から引き渡される。

船員の手には彼が手渡されると、直ぐ様小船は離れて街へと戻って行った。

上甲板に転がされる彼を数人の乗組員が取り囲む。

船長は船倉に入っていた。見て見ぬふりをすると決めたらしい。

「おい、ちょっと待て。コイツ誰だ？」

船員達からざわめきの声が聞こえる。

様子を見に行くとよく知る船員とは全く別の人間だった。

一瞬、ウルビーノで見たヴィーナスの絵が降臨したのかと思った。

幼少期、両親と共にヴェネツィア軍の司令官ウルビーノ公爵グイドバルド2世の居城を訪問した時に、自慢げに見せられたティツィアーノの絵画だ。

目の前の人物の太陽の光に当たり、仄かに光沢する茶色い髪、細筆で引いたような眉、桜色の小さな唇から洩れる吐息は、その伝説が如く、無機質な甲板を季節の草花で彩らせるようだった。

「これは……いい……」

我を忘れて、眠れる人物の顔に手を伸ばす。
絵画を超えた美の存在に、アントニオは歓喜し、その実像を掴もうとする。

そして、その人物の着用している服装が、男性の物だとうやうやく気が付く。

「少年だったか……」

少年の頬を軽く叩いて起こす。少し何かを呟くと少しずつその眼を開く。

黒い瞳がアントニオを一心に見つめる。

彼に見つめられて、気恥ずかしくなり船長を呼ぶ。

「船長！目を覚ましましたよ。でも、どういふ事です？違う人物ですよ」

そうだ、目の前に居る人物は、あの漕ぎ手とは比べ物に成らない。
何処の馬鹿だ？彼とあの酒乱を取り違えた警士は。

船員達を押しつけて、甲板の手摺に捕まり遠ざかる水の都を見つめる少年。

その横顔だけでも、父の世話になっている画家ヴェロネーゼ辺りが見たら、そのまま素描を始めそうだった。

船長と話す少年の声も、春の鳥のさえずりのように美しい。

「……アドニス」

古の神々が愛し奪い合った少年の名がこれほどふさわしい人物居な
いと思った。

「本当にきみは何者なんだい？」

その美しい寝顔を見つめる、少年と言うのは事実だろうか？

幼さが少し残る顔が、小さな格子窓から洩れる月明りで幻想的に
彩られる。

確かめたい。

その欲求を抑えきれず、手を伸ばす。服まではもう僅かだ。

「……お爺様、ごめんなさい」

唇から洩れるその呟きに、己の欲情に罪悪感が湧いた。

「……いったい何を考えていた」

追及するのは止めよう。人には知られたくない事は多くある。

同じ部屋の乗組員で良かった。次の港で降ろされる人間や別の部屋であれば、とても耐えられなかっただろう。

「……俺も寝るとするか」

「……体中が痛い」

翌朝、布団から起きると腕とか足とかから激痛が走った。なんなのよこれ。

「普段運動して無いという証明だな。おはよう、シロツコ」

「おはよう、アントニオ」

「体中が痛いだけか、気分が悪いとか無いのか？」

私は少し考えて言った。体が痛い以外に違和感はない。

「別に無い。大丈夫、体が激しく痛むだけ」

「船酔いしないのか、凄いな。俺が初めて船出した時は、それは酷かったさ」

「顔をダビデ像みたいにしてよ、桶が片時も離せなかった。最後は舌と内臓まで吐きだすかと思っただぜ」

「……これから朝食なのにやめてよ」

「ああ悪い、行こうぜシロツコ」

朝食の固焼きビスケットと肉の煮込み、アルコール度数の高いマルヴァジア酒の水割りが出される。

「船の上で暖かい食事が出る事は余り無い。しかも生の鶏肉から作られている、奮発したな」

「もうじきパレンツォに到着するからさ」

アントニオの疑問に答えたのはコック長だ。

「あそこで補給も行われる、多少豪華にやっても問題は無いさ。それより坊主、船酔いせずによく飯が喰えるな、良い船乗りになれる証拠だぜ」

「ありがとうございます、コック長さん。あ、後名前はシロツコですよ」

「シロツコか！たまげたなそいつは良い名前だな」

コック長は帽子の上から私の頭をガシガシと撫でまわす。
気持ちは嬉しいけど、帽子がずれそうに成るので困るなあ……

「おい、シロツコ早く食べて行くぞ」

アントニオがやや不機嫌な声で私を促す。
慌ててビケットを残り汁に浸し、口に流しこんで船倉を後にする。

「……眩しい」

黒いフェルト帽の縁を眉の位置まで抑え、照りつける太陽からその身を守る。

目の前に見えるパレンツォの港には、数隻のガレー船が停泊しており、その周りには花に群がる蜜蜂のように無数の小舟が、木箱や樽を積んでガレー船を取り囲んでいた。

「あのガレー船が合流予定だった船団だ。」

後ろからアントニオが話しかけてくる。

「先日、あの地でペストが発生してね、上陸するのは禁じられたんだ。」

だから、ああして小船で補給しなくてはいけなくなった」

アントニオは私の姿を見回して苦笑する。

「運が良かったな、この船の船員に雇われて。
昨日の体力の無さを見れば、お前なんか直ぐに感染しておっ死ぬよ」
「さあ、俺達も荷揚げを手伝うよ」

数人の船員と共に、ロープを引き上げて積み荷を甲板へ引き上げる。

幾ら喫水線の浅いガレー船とはいえ、揺れる船の上での荷揚げはかなりの重労働だ。甲板の上も濡れている為、皮の靴は中まで濡れて気持ち悪い。

幾度目かの引き揚げの時だった。

「ロープの拘束いいぞ！」

下の小船から威勢の良い声が掛かる。

「よし、引き上げるぞ。それ！」

数人がかりでロープを引っ張り、じりじりと樽が船尾へと上がっていく。

後少して船員の手には樽が届く時だった。

「うわぁ！」

甲板で足を滑らせて、転倒してしまった。

「この馬鹿！ロープを押さえろ！」

「樽が斜めになっているぞ！早く修正しろ！」

片方のバランスが突然崩れた為に、樽が斜めになる。更にロープが解けて、樽が海上に叩きつけられる。

「うお！」

「どわぁ！」

重心を失った船員がまとめて転倒する。

突然の事態に茫然としている私の胸倉を起き上がった船員の一人が掴む。

「この糞ガキが！貴重な真水をどうしてくれる！？」

「……ご、ごめんなさい」

産まれて初めて怒号を正面から受けた私は、動揺して混乱する。心臓が早鐘のように脈打ち、恐怖で歯の根が鳴り、声が震える。

「ごめんなさいじゃねえ！」

振り下ろされる鉄拳を覚悟して目を閉じる。

しかし、待てどもその衝撃が私を襲う事は無かった。

「やめろ！」

アントニオが船員の腕をガッチリと掴んでいた。

その華奢な体格からは信じられない力で腕を掴まれた船員は身動きが取れない。

「まだ新米だぞ、多少の失敗は目を瞑れ！」

「いてて！手を離せ！」

アントニオが手を離すと船員の怒りの矛先が彼に向いた。

「その失敗はお前の管理不足からじゃねえか！」

「……そうだ、俺の責任だ」

船員の鉄拳がアントニオを襲うが、彼は微動だにせず受け止める。

「お前らは甲板掃除でもしてやがれ！」

船員は甲板に唾棄すると、荷揚げ作業に戻って行った。

「……行こう、シロツ」

「……うん」

それから私達は一日中、甲板掃除や船具の手入れをしていた。

その日の仕事はろくに会話せず、その後の食事も殆ど喉を通らなかった。

第三話 ヴェニスの水晶

その日の仕事を終えると、船長から部屋に呼び出された。間違い無く昼間の一件だろう。

その罰に怯える私をアントニオはやさしく宥めてくれた。

「大丈夫だよ、水の樽一つ位でそこまで怒られないさ」

「確かに、航海中ならともかく、補給中なら仕方あるまい」

「ソランツォ船長！」

後ろから船長に声をかけられる。

「部屋に入れ、とにかく話を聞こうじゃないか」

「大まかな事情は分かった。故意の事故で無い以上、今回の一件は問わない」

船長の言葉に胸をなで下ろす。

「だが、貴重な物資を損耗させたのは事実だ」

「だが、シロツコ君には支払うお金は無い」

「…アントニオ」

「はい」

「君の監督責任だ。水の代金は君に請求する」
「…下がってよし」

部屋に戻ると、私はいたたまれない気持ちになり、アントニオに謝罪する。

「アントニオ、ごめんなさい。あなたが落とした訳では無いのに…」
「気にする事は無いよ」

「でも！」

「シロツコ、その手！」

「ああ、大丈夫だから気にしないで」

私の手は慣れない力仕事で皮が破れてしまっていた。
仕事中は塩の付いた船具を扱っていた為ひどく痛んだが、次第に慣れてしまった為、今はそれほど気に成らなかった。

「ダメだよ。汚れは落とさないと化膿するよ！」

「ちょ、ちよつと！」

アントニオが私の手を掴み、自分の胸元に寄せる。

タオルで丁寧に汚れを落とすが、傷に染みて痛みが走った。

「……痛ッ！」

「それぐらい我慢しろ」

私の手首にアントニオの体温を感じる。

そういえば、家族以外の人間に触れた事もそうなかったな。

そう考えると体が熱くなり、顔が赤くなった。

「よし、これでいいだろう」

「シロツコ、そんなに落ち込むなよ。次から気を付ければいいじゃないか」

アントニオは一旦言葉を切り、少し上ずった声で言った。

「明日から今日の分を取り戻せば良いだけだよ！」

よかった、暗い船内のお陰で私の表情の変化には気が付いていないようだ。

「…うん、そうだね」

そうよ、私はこれから一人で生き抜いてやるんだ！チエチーリアと言うユダヤ人の血を引く女ではなく、ヴェネツィア人の船乗りシロツコとして！

「ありがとうアントニオ！」

飛びつきりの笑顔でアントニオに礼を言つと、月明かりに照らされた彼の顔が、何故か赤みを増した。

「さーて、明日から頑張らないとね！早く寝ましようアントニオ」

「……おっ、おっ」

「じゃあ、おやすみなさい」

布団に横になり、低い天井の木目を見ながら昼間の出来事を回想する。

荷揚げ作業中、俺は船に運ばれる在庫の確認作業をしていた。

「うわぁ！」

声が聞こえて、その方向を見るとシロツコが尻餅をついて転倒していた。

突如、一人分の力を失った片側のロープは、ズルズルと滑り落ちて行くのが見えた。

「まずい！」

しかし、ロープに駆け寄るより早く水音が聞こえて、下を見ると海の上に樽が1つ浮いているのが見えた。

「……遅かったか」

「この糞ガキが！貴重な真水をどうしてくれる！？」

「……ご、ごめんなさい」

後ろを振り返ると、船内でも気が荒い事で評判の船員が、シロツコの胸倉をつかみ上げて殴りかかろうとしていた。

シロツコの顔面は蒼白になり、恐怖で震えあがっていた。

「やめろ！」

その姿を見て、とつさにその船員の腕を掴み、動きを止める。
幾ら巨漢とはいえ、腕を背中にまで廻してしまえば、簡単には身動きは取れない。

「まだ、新米だぞ！多少の失敗は目を瞑れ！」

何故か、シロッコに暴力を振るおうとする船員に怒りが沸いた。
普段なら多少の鉄拳制裁はやむおえない物として許されている。

しかし、シロッコに暴力をふるう事は許さない。

「いてて！手を離せ！」

手を離してやると、権利を行使できなかった船員の怒りがこちらを向く。

「その失敗はお前の管理不足からじゃねえか！」

なるほど、それは言えている。つまり俺が罰を受ければ収まりが付く訳だ。

他の船員達も同様の気持ちな様だ。誰か責任を被わなければならぬい。

それなら、甘んじて受けてやろうじゃないか。

「……そうだ、俺の責任だ」

船員の拳が頬を襲うが、足を踏ん張り堪える。
その瞬間、シロッコは目を瞑り、顔をそむけた。

「お前らは甲板掃除でもしてやがれ！」

船員が作業に戻ると、未だに震えているシロッコに声をかける。

「……行こう、シロッコ」

「……うん」

その日、シロッコは沈んだままで、就寝直前まで治る事は無かった。

「アントニオ、ごめんなさい。あなたが落とした訳では無いのに……」
シロッコが場違いな謝罪をする。

何故、船長の気持ち分からない。他の船員に対して示しが付かないから、私に代金を請求したのだ！そう怒鳴りつけてやりたがったが、兎のように震えるシロッコにそのような態度をとれる筈は無い。

「気にする事無いよ」

熟練の石弓兵ともなれば、給与的にはかなりの待遇になる。新米の船員と比べるまでも無い。水の一樽ぐらい大した額では無いのだ。

「でも！」

ふと、アントニオの白く細い手が視界に映る。しかし、その掌は豆が潰れて血が滲んでいた。

「シロッコ、その手！」

「ああ、大丈夫だから気にしないで」

大丈夫なもんか！自分も経験したことが有るが、潰れた豆に海の塩が入ると激痛が走るのだ。シロツコの手首を掴み、強引に自分の胸元に寄せる。タオル傷口の汚れを丁寧に落とし始めた。

「痛ッ！」

「それぐらい我慢しろ」

柔らかくて小さな手だ。シロツコは今までどんな生活を送っていたのだろうか？

ユリの花のように細く、白い手が実に美しい。掴んだ手首から伝わる脈動が、目の前の人物が大理石で作られているのではなく、確かにここに存在する事を表していた。

「よし、これでいいだろう」

顔を上げて視線をシロツコに移すが、折しも月が雲に隠れてシロツコの表情を窺い知ることとは出来なかった。

しかし、言葉を尽くして励ましていると、天に祈りが通じたのか少しづつ雲が晴れて、うつむいたシロツコの顔が見えて来た。日に焼けたのか、顔が僅かながら桜色に染まっていた。少し上目使いでこちらを見る表情が、堪らなく自分の感情を煽った。

「明日から今日の分を取り戻せば良いだけだよ！」

少々、声が上がってしまったか？等と考えていると、シロツコは小さく「よし」と呟き、顔を上げる。

「ありがとうアントニオ！」

その瞬間、霞掛かった雲は完全に立ち去り、シロツコの満月のような笑顔が空き明り照らされた。初めて見るシロツコの笑顔は、自分を大理石のように硬直させて、その後どのような会話をしたか殆ど覚えていなかった。

月の女神セレネに見染められたエンデュミオンは、今の自分と同じ気持ちだったのだろうか。そのように考えながら、次第に誘われつつある夢の中へと踏み込んで行った。

翌日、私は微睡むアントニオを起こして、その日の仕事に従事する。下船倉に行き積み荷の数を確認する仕事だった。

サン・カテリーナ号の簡単な構造は、船首楼に砲台が設置され、上甲板が有り、船尾楼が有る。私達の部屋は船尾楼の中に存在する。船長室も隣に有り、かなり待遇の良い場所だった。アントニオに聞いたら、ソランツォ船長は親戚筋に当たる人でその伝手もあってこの場所に居るのだよ、と教えてくれた。

甲板の下には漕ぎ手が居る下甲板が有り、上甲板は照りつける太陽から漕ぎ手を護る屋根の様なものと教えてくれた。甲板の下には積み荷を保管する船倉がある。この場所は暗い上に湿気が多く、足元は常にぬかるんでいた。

「ひゃッ！」

「大丈夫かシロツコ!？」

アントニオの腕に抱きとめられ、どうにか転倒しなくて済んだ。

「あの箱が積み荷になる。数が変わって無いか定期的に確認するんだ」

カンテラを台の上に置き、箱を開けて中を確認する。

「……綺麗」

箱の中身を見て思わず呟く。

その中身はヴェネツィアが誇る最高級品のガラス細工のグラスだった。

カンテラの明かりに揺られて、様々な輝きを見せるそれは、夕日に沈む波飛沫を見ているようで目を奪われた。

「“ヴェネツィアの水晶”と例えられる品々さ。豪奢品として高く売れるのだろうな」

アントニオは呟きながら目録と照らし合わせ、木板にチェックを入れて行く。

「シロツコ、その箱はもういい。次はそっちの箱を開けてくれ」

次の箱に入っていたのも見事なガラス細工だった。

人の頭ほどのガラス玉は、全体が深い青色で、幾つかの模様と文字が彫り込まれていた。

「何の模様？」

カンテラの明かりでは文字をなぞる事も模様も良く確認できない。
アントニオは箱からその中身を取り出して、光源に近づける。

「…この部分を良く見て」

指差された部分の文字を読むと“ V E N E Z I A ”と刻まれていた。

「イタリア半島！」

「正解、これはガラスで作った地球儀だよ」

アントニオはガラス玉を指差しながら饒舌に説明する。

「これがロンドン、イングランドの首都さ。その近くのアムステルダムは最近独立戦争が起きて政情が悪くなりつつある。で、こっちがイスパニアのセビーリヤだろ。その近くにポルトガルのリスボン、大西洋を挟んだこちら側がクリストフォロ・コロンボが見つけた新大陸さ！」

アントニオは水晶球をひっくり返して地図の一点を指す。

「イル・ミリオネを読んだことある？マルコ・ポーロが言っていたジパングが此処さ」

「知ってる！東の海上に浮かぶ島国で、莫大な黄金が産出され、宮殿や黄金は全て金で出来ていると説明されていた場所！」

「勉強できるんだな！えらいぞ」

アントニオは私の頭を犬のように撫でる。

「ねえ！この船はジパングへ行くの！？」

アントニオは頭振って否定する。

「この船の行き先知らないのか？この船の行き先はここだよ」

地球儀を地中海が記載されている面に移し替えて一点を指差した。

「砂漠の国アラビアの街アレクサンドリアさ」

その日も仕事を終え部屋に戻ると、アントニオはすぐに眠ってしまった。

彼曰く、文字を追うのは疲れるそうだ。私は本を読むのは好きだったから彼の気持ちを理解できないが。

「……アントニオ、眠ったの？」

しばらくして、アントニオに声をかけるが返事が無い。

「眠っている…よね？」

顔を覗いて確認してみる。健やかな寝息が聞こえる。

「…これなら、大丈夫ね」

意を決して、帽子を床に置き、ベルトを脱ぎ捨てるとカサツカのボタンを外していく。粗末なシャツとブラコー二を脱げば、窓から差し込む月明かりにその裸身が露わになった。

タオルに水を浸して、体の汗や汚れをふき取っていく。ヴェネツィアに居た頃は祖父のいいつけで、毎晩のように沐浴をしていた。体を洗わない生活等想像も出来ない。しかし、船の上では水は貴重である。また部屋の外では船員が作業しており、その身体を見られる恐れが無いのはこの部屋の中だけであった。

「……うん」

「ひッ！」

とつさにタオルで前を隠し、振り向いてアントニオの顔を覗く。

「寝言か……」

よく考えると、とんでもない行動をしている事に気が付いた。幾ら相手が眠っているからとはいえ、男性の前で裸になるとは娼婦にも等しい行動だ。

急に顔が紅潮していてもたっても居られなくなる。手早く体を洗い清めシャツに袖を通して、アントニオのはだけたシャツから精悍な胸板が覗かせていた。

「ロレダンさま……」

愛しき元婚約者の名前を呟く、私にはもう二度とエンリコ・ロレダンに抱きしめられることが無いと思うと、一筋の涙が頬を伝った。

床に落ちたその雫は

月明かりで美しく輝き

まるで水晶玉のようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8027v/>

海の都の少女

2011年10月1日20時21分発行